

Title	PRELUDE TO A KISS
Author(s)	米井, 力也
Citation	人文學報 (1995), 75: 229-247
Issue Date	1995-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/48432
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

PRELUDE TO A KISS

米 井 力 也

- I 宣教師の挨拶
- II 口を吸ふ
- III 拝む・いただく
- IV 抱きつく・顔に顔をあてる
- V 足を吸ふ・手を吸ふ
- VI 顔を吸ふ・面を吸ふ
- VII 無事のしるし
- VIII 無事と戦ひ

I 宣教師の挨拶

ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは日本とヨーロッパの風習の違いについてまとめた『日本覚書』のなかに、「われらにおいては、別れるときとか、外から帰って来ると、抱擁するのが習わしである。日本人はまったくそのようなことをせず、むしろ、そうするのを見ると笑う」と記した。挨拶として抱擁するという習慣のない日本人の眼には、キリシタンの宣教師たちが抱き合う姿はいかにも奇異に映ったことだろう。なぜ日本人は笑うのか。宣教師たちにとって、その笑いのなかに含まれる日本人の違和感を把握するのはむずかしかったにちがいない。

キリシタンの宣教師が日本の挨拶の方法を観察し、それを実行したことは、ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』に、酒や茶のことも含めて、礼儀・挨拶・贈答・儀式に関する記述が二十章ほど見られることから明らかだろう。これは、日本の風俗に合わせた布教をするために必要な知識だった。ただ、宣教師がすべての点で日本の文化に迎合したわけではあるまい。フロイスは『日本覚書』に、「われらにおいては、和解した人びとは互いに赦しを乞いあうか、または抱きあう。日本では、非のあったほうが、相手の前で手をこすり、相手のついた盃を飲みほす」とも書き記し、異文化としての日本の挨拶を相対化しようとする姿勢を示したが、彼が実際にこのようなしぐさをしたという記録はない。

宣教師が日本の風俗に合わせるのはあくまでも異教徒を改宗させるための手段であって、彼らの目的はキリスト教を広めることにあった。そのため、キリスト教の立場から認められない日本の風俗については容赦しなかった。たとえば、一夫多妻を当然とする婚姻制度や同性愛としての男色を暗黙のうちに認める風潮に対して、彼らはたいへん厳しく非難したのである。バテレン追放令を出す以前の秀吉が、一夫多妻さえ認めてくれればキリシタンになってもよいと言ったのは、たとえ外交辞令だったとしても、宣教師の要求が当時の支配層には受け入れにくい性格のものだったことを暗示する。

このような状況のもとで、神と隣人への愛を中軸に据えたキリスト教の布教は困難をきわめた。キリスト教の愛という観念を日本語であらわすために、仏教語としては悟りを妨げるものとして否定的にしか用いられず、ともすれば性愛に傾きがちだった「愛」または「愛する」ということばを避けて「御大切」「大切に存ずる」といった表現を選んだのも、そのような困難を意識していたからにほかならない。宣教師はきわどい平衡感覚をもつ必要があった。

II 口を吸ふ

宣教師は、目に見えない神への愛だけではなく、隣人に対する愛の重要性も伝えるという使命を帯びていた。したがって聖書をはじめ多くのキリスト教の書物にくりかえし描き出されるキスという行為をどのような日本語であらわすか、という問題をなおざりにすることはできない。それはキリスト教の愛の観念を象徴する行為であると同時に、現実におこなわれる挨拶として視覚的なイメージをともなうため、日本語への翻訳が不可欠である。しかし、問題はそれだけではなく、すでに秘められた性愛の行為としてのキスをあらわす日本語が存在していたからである。性愛の表現としてのキスが当時どのような日本語で言いあらわされていたか、という問題を宣教師は避けて通ることができなかったのである。

「接吻」「くちづけ」という訳語が用いられるようになったのは江戸時代後期のことでオランダ語や英語からの翻訳だから、16世紀後半から17世紀初頭のキリシタンの時代には存在しない。この時代には「口を吸ふ」ということばが一般的だった。それは、たとえば、狂言のなかで、老人が若武者の口を吸いながら家の中に連れ込むといった同性愛・男色の場面で用いられる。

わか衆の中より下知をなしへ、さすがに是はおやかたたちなり、かまひてへあやまちすなと、はしりよりいだきつきへ、せいずれば、おもひのほかなるにやくぞくずきし、へて、わがいゑへにぞかへりける（ちごの口をすうておふて入也）（虎明本狂言『老武者』）

狂言のなかには「しどろもどろのはそ道を清水のへさか中のへ桜の下でわかしゆとであふて一どすうちやしちよへ二どすうちやしちよへあじきな身やなおれが身は」（虎明本狂

言『かなわか』などと歌うものもいれば、唇をとがらせて夫を追いかけて回す「わわしい女」もいる。

おつとよろこびて、さらはさかづきをださうずるといひて、さかづきをだして、さかもりして、さけをとりて、さらはこそでをおとりやれといひて、こそでを取たれば、ふくれなるによつて、きもをつぶすを、おひまはりて、口をすふておつとをおいて入、又おひまはりて、おひ入にもするぞ（虎明本狂言『いははし』）

また室町物語のなかでは、ひそかに恋い焦がれる女の口を吸いたいと願う男の願望を吐露する場面でこのことばが用いられた。

さて大葉子にかく事は、たゞ姫熊をあひなれて、口を吸はるゝよしもがな、いつまで草のいつまでか、かかる思ひに臥し沈み、逢ふことなしの草ならん。かやうの草を刈り持ちて、地頭殿へぞ参りける。（室町物語『高野物語』）

歌合の形式で描かれた『御茶物かたり』では「ちやわん」の歌「てにとりてくちすうほどにひきなせとあわてたつなはちやわむなりけり」、あるいは「ひふきたけ」の歌「くちすわれしりにこくるをいとはねはいやくみゆるひふきたけかな」にもこのことばが見られる。

これらはあくまでも性愛を連想させる表現であり、いわば秘められた行為を示すことばであった。秀吉がまだ幼い我が子への手紙の中で、

返す――御ゆかしく候まゝやがて――参り候て口を吸い申すべく候。又われ――留守に人に口を御すわせ候はんと思ひまらせ候。鷹の雁三竿進上。

文給はり候。御うれしく思ひまらせ候。ことに見事の爪の刀一しほ満足申し候。やがて――参り候て御礼申すべく候へどもまづまづ播磨守をもて申し上げ候。おの――へもことづて申し候べく候。めでたく、かしく。（秀吉書簡）

返す――御ゆかしさ申すばかりなく候間やがて――歳末に参り候て申すべく候。御かゝさまへも文にて申すべく候へども御心へ候て給はり候べく候。めでたくかしく。

文給り候。御うれしく思ひまらせ候。昨日も状をもて申し入り候ごとくこゝもと普請申しつけ候によつて存じながら申さず候。やがて歳末に参り候て申すべく候。其の時口を吸い申し候べく候。たれ――にも少しも御すわせ候まじく候。そなたの事こなたへーだんよく見え申し候。かしく。

と、かわいいお前の口を吸いたいものだと書き記しているのもその延長線上に位置する表現と見てよいだろう。教会の中で、あるいは路上でかわされる宣教師たちの挨拶とはまったく性格を異にする。宣教師たちが抱擁する姿を見て笑った日本人にたいしてキスの翻訳語として「口を吸ふ」を採用するのは危険ですらあった。

こういった背景を反映してキリシタンの書物の中では「口を吸ふ」ということばは特殊な場合にしか用いられない。キリシタンの教えに背いて他人の妻に手を出した男の赤裸々な告白に

は osculor の訳語としてこのことばが見られる。

この中に、契りのよい仕合せが無い時は、それに随ってなり次第その五体に手を掛け、口を吸ひ、抱き、恥を探ること等は思ふままにしまらす。(『懺悔録』)¹⁾

これは、あきらかに性愛の表現であり、姦淫を戒めるキリシタンの立場からは非難されるべき行為にほかならない。したがって「口を吸ひ」と訳してもさしつかえないのだが、このように日本語の用法と抵触しないのは数すくない特例であり、キリシタンはみずからの日常的な行為としてのキスを翻訳するにあたって訳語を慎重に選ぶ必要があったのである。

日本語の「口を吸ふ」と区別するために採用されたはキスの翻訳はどのようなものだったのか。宣教師たちは実際にどのような訳語をあてたのか。キリシタンによるキスの翻訳の諸相を見る必要があるだろう。

Ⅲ 拝む・いただく

恭順の意をあらわす挨拶としてのキスの翻訳では、『羅西日対訳辞書』に、

Osculor, aris: besar; sui, ũ. Pedes osculor, aris: besar los pies palabra cortes, Voaxivo itâdaqi, u.

とあるように「御足をいただく」という語を用いる場合がある。

世界の智者、学匠は言ふに及ばず、金銀、珠玉、財宝の楽しみにも勝ち給ひ、世間の邪樂に敵対ふエワンゼリヨの御法に人々を引き入れ給ひて、帝王も將軍も冠を脱ぎ、卑しき旅人の足を戴き給ひ、いかにも貧賤なるサセルドウテへその身の悪を懺悔し給ふ事はいづくより出でたる力と思ふや？ これ即ち御主ゼズキリシトの御威力なる事明かなり。(『スピリツアル修行』)

これはイエスの弟子が「使徒」として伝道するときに受けた崇拝を「帝王も將軍も…足を戴き給ひ」とあらわすものだが、「いただく」ということばによって足にかぎらず、さまざまなものへのキスをあらわすことができる。たとえば、獄中に捕われている聖人の体へのキス。

右に言ひし、サンクレメンテを養君とし給ひし、サンソヒヤはこのことを聞き給ひて、大きに喜び給ひ、サントのまします籠に至り、涙を流し、サントの御つがひつがひを謹んで戴き給ひ、この年月の御苦しみを語り給へとありければ、詳しく語り給ふなり。サンソヒヤ手拭にて、御血に染みたる御身を拭ひ、御食をも参らせらるるものなり。(『サントスの御作業』サンクレメンテ伝)²⁾

あるいは、説教師が踏んだ地面にキスをするありさまを「いただく」によってあらわす場合もある。

サンタカテリナデセイナは、エワンゼリヨの談議者の踏まれし足跡に口をあて給ひて、戴き給ふを何事ぞと問ひ奉るに、此は人のアニマを、パライズへ導く役を持ちたる人なれば也と答へ給ふ也。又我を以てインヘルノを塞ぎて、アニマの墮落せぬ様に計らひ給へ、我君と、Dsに言上し給ふ也。(『ヒイデスの導師』)³⁾

被昇天を控えた聖母マリアの衣装へのキスも「いただく」という語であらわされる。

さておのおのアポストロ相集まり給へば、互ひにご対面の御喜びも最も深かるべけれども、別して御母の御目にかかり給ふご歓喜は類ひあるべからず：いかほどの敬ひを以てかその御衣の裳を戴き、いかほどの喜びを以てか御顔ばせを拝み給ふべきぞと思案せよ？ 真に御母を見参らせられん時は、ご大切の御師匠に会ひ奉る御心地なるべし。さて又互ひの御物語にもデウスを尊み敬ひ給ひ、信心を催し、歓喜の涙を流し給ふより外あるべからずと、思案せよ。(『ロザイロの観念』)⁴⁾

「いかほどの敬ひを以てかその御衣の裳を戴き」という部分に十二使徒の崇敬のほどがうかがわれる。同様に「拝む」「拝する」ということばを用いた例をあげることができる。

我は旅人にて貧なれども、世界の人民に天の御法を教ゆる也。今我がこの姿はクルスの上にて見苦しくなりはつべし、さりながら我を真のDsと拝ませ、又かかるべきそのクルスは、如何にも慰撫を以て人々より崇められ、そのクルスに打ち付け等るべき金釘、いぎの冠、その外我がパシヨンの苦患の道具をば深く拝み用ゐ、何れの金玉よりもまさりたる宝なりと渴仰する様にすべし。(『ヒイデスの導師』)⁵⁾

又御死骸を薫香を以て塗り奉らんと御棺に赴き給ふ善女人の志を知ろしめして、御蘇生ありて、御迎に赴き給ひ、御手、御足の御疵を拝ませ給ふと、マテウス二八に見えたり。(『ヒイデスの導師』)⁶⁾

又続けて宣ふは、デウスより我に預け給ふエケレジャの裁判をさしおくこと叶ふに於ては、この、サンパウロ アポストロ マルチルのからめとられ給ふ鎖を拝し奉るために、いそぎ参りたきとの望みばかりなりと。(『サントスの御作業』マルチレスの証拠)⁷⁾

いずれも尊崇や恭順の姿勢を示すために敬語を用いる点に特徴がある。これらは、より日本語らしい表現として用いられたものである。しかし、その分キスという行為のもつ意味が薄められるおそれのあったことも否定できない。日本語としてすでに流通している表現を選べば意味変化をこうむることはやむをえないとしても、異文化の翻訳として十分とは言えないだろう。

IV 抱きつく・顔に顔をあてる

「いただく」や「拝む」と並んで、こなれた日本語を用いるものとして、弟子や子どもにたい

する愛情表現をあげることができる。たとえば、

ソヒヤその御死骸に逢ひ給ひたることは、アンジョー一体ソヒヤにまみえ給ひて、サンタのことをつぶさにつけ給ひ、御死骸のありかをも尽く教へ給ふなり。これによつて知り給ふなり。マルチルになり給ふことは御喜びとは申しながら、さすがに長き別れの悲しさは共に死なんには如じと、歎き、御死骸にいだきつき、声も惜しまず泣き給ふなり。(『サントスの御作業』サンタアナスタジャ伝)⁸⁾

汝を胎内に宿し身にかへて、大切に抱き育てたる恩を忘れずは、汝のつがひつがひを御主に対し奉り捧げ奉りて我を喜ばせよ。この御主へ対し奉りては大忠功、我に対しては孝行たるべし。いかにわが喜び一命の光り、この遺言汝が上に少しも違ふまじきと頼もしく思へば、かへすがへすも頼むなり。さればエブレヤの女人の中に七人の子を御主へ捧げられたるためしあり。我は只汝一人を持ちたり、さりながら今の遺言を違へず、御主の捧げ物となるに於ては、わが為には満足なるべし。然るに於ては世の中の母たる人の中に於て、わきて我独り果報なるべし。今汝を離るるといへども、スピリツを残すぞ。御主デウスに対し奉りて、マルチリヨの合戦にたしかに利運を開かんと思へば、心をなぐさめ、御主の御前に参るべしと宣ひて、御子に抱きつき給ひ、喜びの涙と共に空しくなり給ひ、御アニマはデウスへ参り給ふものなり。(『サントスの御作業』サンクレメンテ伝)⁹⁾

のように、「いだきつく」を用いるものがある一方、「撫育する」という言葉を使う場合もある。

この御大切を歎き給ふ人々の為に甘露となることを聞け、それと云ふは、人間に対し給ひて頭はし給ふDsの御大切は、我等が心を起す勧めとなるといへども、別してこの御大切の勧めとなるは、御知音にDsより与え給ふ御音づれの甘味なり、譬へば大切といふものは二様にあり。一つには、エセンシャルといひて、強き大切のこと、此を以て親は成人なる子をも思ふ也。二つには、テンロといひて、和かなる大切なり、此を以て親はいとけなき子を思ふなり。これに引かれて子を愛し、撫育するもの也。されば天にまします我等が御親も、スピリツアレスの御子に対して、一番の御大切を尽し給ふことは申すに及ばず、二番目の御大切をも現はし給ふなり。(『ヒイデスの導師』)¹⁰⁾

これらはたしかに愛情表現ではあろうが、キスという行為を彷彿とさせることはない。ところが、親族の間における親愛表現には別のことばもある。それは「顔に顔をあて」というかたちである。たとえば、旧約聖書の創世記に基づくヨセフ伝の一節は、再会したヨセフたち兄弟の姿を次のように叙述する。

御弟のベンジャミンにいとなつかしげに抱きつき、御膝の上にかき寄せ給ひ、御涙背期あへさせ給はず、御弟のベンジャミンもジョセフの御手にすがりつき、まことの兄弟もろともにしばしは涙に沈まれける。その後ジョセフ先腹の兄弟十人一人づつ御顔に顔をあてさせ給ひ、一人一人に御涙を流させ給ふぞあはれなる。これよりしてこそ十一人

まことは兄弟なりけると力を得給ふ有様なれ。(『サントスの御作業』パトリアルカ・ジョセフ伝)¹¹⁾

「顔に顔をあて」という言い方は後代の「接吻」と近いと言える。だが、これは翻訳語ではない。これに類する表現が日本の物語にも見られることは、注目すべきだろう。

静も母もこれをききて、手に手を取くみて、かほにかほをあはせて、こゑもをしまわずかなしみけり。(『義経記』6・静鎌倉へ下る事)

伊東は、あまりのかなしさに、しばしは膝をおろさずして、かをにかほをさしあて、くどきけるこそあわれなれ。(『曾我物語』1)

四大日々に衰て、万死一生に成し時、彼少人、上人の膝を枕にし、手に手を取りくみ、顔にかほをあはせて、互に別を惜給けるに、遺言、実に哀に覚。(『稚児観音縁起』)

「顔に顔をあて」という翻訳の場合、「拝する」や「いただく」に比べてずっと行為のイメージを喚起しやすい。しかしながら、別離の悲しみや再会の喜びをあらわすことはできても、キリスト教独自の挨拶をつねに表現できるとはかぎらない。唇を接するかたちでなされるキスをより具体的にあらわすためにクリシタンはどのような訳語を用いだろうか。

V 足を吸ふ・手を吸ふ

「ピエタ」という題で多くの画家によって描かれた場面がある。十字架上で処刑されたイエスが地上におろされたとき聖母マリアがその体をかきいだという、キリスト教徒にとって究極的な悲しみの構図といってもよい。これをクリシタンは次のように訳している。

御母ビルゼンマリア御子の死骸を抱き取り給ふ時、哀れなる御心いかばかりならんや？

又御疵の跡をつくづくと御覧じ、双びなき心の御痛みを以て一々に御口を当てて吸ひ給ひ、抱き付き給ひ、多くの御涙を以て御疵を洗ひ給ふ御有様の事。(『スピリツアル修行』)

悲嘆に暮れる聖母マリアの姿を思い浮かべることによってイエスの受難の意味を体感させようという意図を宣教師たちは抱いていた。そのため「抱き取り給ふ」あるいは「つくづくと御覧じ」といった表現にならべて「御口を当てて吸ひ給ひ」ということばを用いて、その悲しみを鮮明にあらわしたのである。このとき、キスという行為が「口を吸ふ」とはまったく位相を異にするものであることはいうまでもない。また、福音書に登場する「罪深き女」がファリサイ人シモンの家の中でイエスの足にキスをする姿は、

あるハリゼウ一人ゼズスを請じ奉れば、かの私宅に赴き給ひ着座し給ふ折節、その在所に極重罪なる女房ゼズス　ハリゼウの私宅へ御幸なりぬと承はり、白石の小箱に薫香の薬を持参し、ゼズスの御跡より感涙をもって、御足を潤ほし、鬢髪をもって拭ひ、口をもって吸ひ、件の薬をもって塗り奉られけり。(『バレット写本』)¹²⁾

とあるように、「(御足を) 口をもって吸ひ」と訳された。「感涙をもって」とある以上、その行為が生半可なものでないことは誰の目にもあきらかだろう。イエスにたいして恭順の姿勢を示すマグダラのマリアの場合も同様である。彼女が復活したイエスを喜びとともに迎えるところは、次のように訳される。

かの所に在り合ひ申されたる善男子善女人達声声に泣き口説き、愁嘆し給ふ事を観ぜよ：中にも深く御大切に思はれ給ふサンジョアン又はサンタマリアマグダレナ甘露の御師匠にて在ます御主の御足に取付き、尽きせぬ涙を以て浸し、口にて吸ひ飽き給はざる事を観ずべし。(『スピリツアル修行』)

然ればサンタ マダレイナ深くご大切に思ひ申さるる御師匠をそれと見知り奉り、ご丁寧のみ言葉を聞き、その名を指して呼ばれ給ふ時の心中の御喜びはいかばかり深かるべきぞ？ その時までの愁嘆は刹那に歓喜となり変り、余りのご大切に燃え立ちてご威光をも憚らず、ただ御足許に倒れ伏し、御足を吸ひ奉らんとせられし也。(『ロザイロの観念』)¹³⁾

このほかに、一介の漁師だったペドロがローマ教皇として崇拝されることを「猟漁りをのみ業とし給ひけるサンペドロの手に天の鍵を渡し給ひ、世界の大王もその御足を吸ひ給ふ事は驚くべき儀に非ずや？」(『スピリツアル修行』)とあらわしたり、恭順・崇敬の行為としての「手」へのキスという形をとることもある。

サンフランシスコ常に宣ふは、サンロウレンソ、又は天にましますサセルドウテにてなきベアトと、現在の才知なきサセルドウテにあひ奉らば、天のサントをさしおき、サセルドウテの手を吸ふべしと。その故は、サセルドウテの御主の御身にふれられ、又人の力に及ばぬことを取り扱はるる手なれば、なりとぞ。(『サントスの御作業』サンフランシスコ伝)

またかの二人の子どももおん身をおん母と思ひ奉りて孝行を尽し奉るべし、また御結約の印には貴き御影のみ手を吸ひ奉り、おん礼をなし奉るべしと、子どもにも言ひ渡されければ；あまりのかたじけなさに感涙を流し、母の仰せに任せその旨を勤め、私宅へ帰り、信心を催してオラシヨを申されけるものなり。(『ロザリヨの経』)¹⁴⁾

あるいは、次のように「ベヤトの御骨」や「布」すなわち聖遺物に対する崇拝を示す行為を指す場合も看過できない。

数多の人は善人の御遺骨以下を拝む為に所々を巡り、その御作業を聴いて驚き、大層なる堂寺を巡って、金銀金砂の類にて包まれたるベヤトの御骨などを吸ひいたゞき奉るに、サントスの中のサント、あるほどの物の御作者、アンジョの御主、我がDsにてまします御身、直にこのアルタルの上にあはしますに、何とて信心を以て拝み奉らざらんや。物ずきなるに依つてか、又は未だ見ざる事なるが故にか、拝みたく思ふ望みに依つて、多くの人、度々か様の参詣を思ひたれども、アニマの徳となり、進退を直すことは少し、取りわき此

は誠の達したる後悔なくて、こゝかしこへ行く時の事なり。(『コンテムツスモンヂ』)¹⁵⁾
御主 Circuncisam を授け奉る時の有様を觀見せよ。先づ御産衣を脱ぎ奉り、誰人か若君を抱き奉り、誰か御膚を破り奉るべきや？ デウスの御血はいづくに落ち散り給ふべきや？
その時の有様を汝がアニマの眼をそばだてむつかり給ふミニのゼズスの御声を聴き奉り、御血に染みたる布の切れを我が顔に宛て吸ひ奉ると觀じ奉るべし。(『スピリツアル修行』)
聖遺物崇拜は仏舍利を崇めるという仏教の経験からおそらく日本人キリシタンにとってそれほど違和感のない行為だったはずである。手足や聖遺物へのキスが崇敬の念に基づいていることも理解されたにちがいない。キリシタンはそれを「吸ふ」という語を用いて訳したのである。
キリシタンの信仰にめざめた者はそれまで忌み嫌っていた存在をも「御大切」の対象とし、彼に奉仕しなければならない。奉仕の行為としてのキスは次のようにあらわされる。

されば俗漢の時、一段癩病人を厭ひ給へば、ゼズキリシトの御大切より力を受け給ひてよりは、あるほどの癩病人に使はれんと思ひ立ち給ふなり。その所にたびたび行き給ひ、要るほどの物をととのへ与へ、ゼズキリシトの御大切に対せられ、手足、面相を吸ひ給ふなり。瘡をも洗ひ、膿をもものごひ給ふなり。(『サントスの御作業』サンフランシスコ伝)
「あるほどの癩病人に使はれんと思ひ立ち」かれらの「手足、面相を吸ひ給ふ」のは、聖人の手足や聖遺物へのキスと同様に「御大切」の念に基づくものにほかならない。こうした行為は日本では光明皇后説話をはじめとして物語の世界ですでに受容されたものであった。このような叙述を介してキリシタンの「吸ふ」という行為のもつ意義がすこしずつ理解されていったのではあるまいか。

さて、それでは挨拶としてのキスはどのように翻訳したのだろうか。

VI 顔を吸ふ・面を吸ふ

「御パシヨン」と名づけられ重要視されたイエスの受難のうち、ゲッセマネの森をでたイエスにユダがキスをしてそれを合図にイエスが逮捕されるという裏切りの場面を『バレット写本』では四福音書のことばをまぜあわせて、つぎのように翻訳した。

その後オラシヨの所を立たし給ひ デシボロの側に御出であって宣ひけるは、今は汝達心安く臥さるべし ビルゼンの子悪人の手に渡るべき時來たるなり 立ち上がり我と共に向かはるべしと宣ふ み言葉の下より十二人のデシボロの中ジュダスエスカリオテス サセルダウテの棟梁エスキリバ宿老より遣はしける数多の兵の案内者として火をとぼし鉦、兵仗を帶して來たるなり 謀反人のジュダス予ての約束には我御顔を吸ひ奉るべき人体を搦め取て油断なく召し籠められよと云ひ捨て、御側近く参りければゼズス御身の上に有る程の事を知ろし召されジュデウら來たれる道に出で向かはせ給ひ 誰を尋ねらるぞ？

と宣へば ナザレトのゼズスと答ふるに我なりと宣う 折節ジュダス以下の者どもみ言葉を承り 後しざりのけに転びけるなり。重ねて誰を尋ねらるぞ? と宣へばナザレトのゼズスと答う。

ゼズス我既に露はしければ 我を尋ねらるるに於いては我とともに来たれる者どもを帰されよと宣ふ。これスキリツウラに我に賜はる者を一人も失はざるとのボロヘシヤを遂げさせられん為なり。

さればジュダス近付き奉てアベ・ラビと申し上げ御顔吸ひ奉るに、ゼズス如何に親しき仲何の故にか来たられけるぞ 吸ふ事を相図にビルゼンの子渡されけるや? と宣ふ。

(『バレット写本』)

ユダはイエスの「御顔を吸ひ奉る」ことを合図にして逮捕のきっかけを作る。弟子たちに抵抗を禁じながら連行されていくことになる直前のイエスを描いたこの部分に対応するラテン語の聖書を見ると、

Tunc venit ad discipulos et dicit illis: 《Dormite iam et requiescite; ecce appropinquavit hora, et Filius hominis traditur in manus peccatorum. Surgite, eamus; ecce appropinquavit, qui me tradit.》 Et adhuc ipso loquente, ecce Iudas, unus de Duodecim, venit et cum eo turba multa cum gladiis et fustibus, missi a principibus sacerdotum et senioribus populi. Qui autem tradidit eum, dedit illis signum dicens: 《Quemcumque osculatus fuero, ipse esto; tenete eum!》 Et confestim accedens ad Iesum dixit: 《Ave, Rabbi!》 et osculatus est eum. Iesus autem dixit illi: 《Amice, ad quod venisti!》. Tunc accesserunt et manus iniecerunt in Iesum et tenuerunt eum. (Vulgata Mt. 26. 45-50,)

Adhuc eo loquente, ecce turba, et qui vocabatur Iudas, unus de Duodecim, antecedebat eos, et appropinquavit Iesu, ut oscularetur eum. Iesus autem dixit ei: 《Iuda, osculo Filium hominis tradis?》 (Vulgata Lc. 22.47-48)

とあり、動詞 osculor, 名詞 osculum という語が用いられ、ポルトガル語訳聖書でも

Então voltou para os discípulos e lhes disse: Ainda dormis e repousais! eis que é chegada a hora, e o Filho do homem está sendo entregue nas mãos de pecadores. Levantai-vos, vamos! Eis que o traidor se aproxima. Falava ele ainda, e eis que chegou Judas, um dos doze, e com ele grande turba com espadas e cacetes, vinda da parte dos principais sacerdotes e dos anciãos do povo. Ora, o traidor lhes havia dado este sinal: Aquele a quem eu beijar, é esse; predeei-o. E logo, aproximandose de Jesus, lhe disse: Salve, Mestre! e o beijou. Jesus, porém, lhe disse: Amigo, para que vieste? Nisto, aproximando-se eles, deitaram as mãos em Jesus e o

prenderam. (PV, Mt.26. 45-50)

Falava ele ainda, quando chegou uma multidão, e um dos doze, o chamado Judas, que vinha à frente deles, aproximou-se de Jesus para o *beijar*. Jesus, porém, lhe disse: Judas, com um *beijo* trais o Filho do homem? (PV Lc. 22. 47- 48)

と動詞 *beijar*, 名詞 *beijo* を用いて訳している。『日葡辞書』によれば、「吸ふ」という語がポルトガル語の *Beijar* (接吻する) にあたると定義されている。「口を吸ふ」というかたちは慎重に避けられているのである。また、『羅葡日対訳辞書』を見ると、

Osculatio, onis. Lus. O *beijar*. Iap. Cauo nadouo sũ coto nari.

Osculor, aris. Lus. *Beijar*. Iap. Cauo nadouo sũ.

Osculum, i. Lus. *Boca pequena*. Iap. Chijsaqi cuchi. ¶ Item, *Beijo*. Iap. Cauo nadouo sũ cotouo yũ.

とあって、『バレット写本』におけるクリシタンの翻訳「御顔を吸ひ奉る」がこの辞書の定義に合致することがわかる。これは『バレット写本』だけではなく、『スピリツアル修行』『ロザリヨの経』でも踏襲している。

ただし同じユダのことばを「面を吸ふ」ということばに置き換えている例もあり、定訳とはいえない。聖書そのものの翻訳ではないが、受難の場면을踏まえた叙述のなかにこのことばを用いた。しかし、これも「顔を吸ふ」という表現のひとつの変形とみなしてさしつかえあるまい。

我等を扶け給はんと思し召す燃え立つ御望を以て御敵にいで向ひ給ひ、謀反人のジュダスは御面を吸ひ奉り、武士共召し捕り奉る事を御領承なされ、情なく搦められ給ひ、御弟子達は見離し申され、アナスが館へ引かれ給ふ事を観ずべし。(『スピリツアル修行』)

同じく「面を吸ふ」を用いた『サントスの御作業』では、ユダがイエスにキスをするのは弟子の一人ヤコブが従弟で顔が似ているのでまちがって逮捕しないようにするためだという。

また世俗の言へるごとく、ビルゼン サンタマリヤの御エウポゾ ジョゼホと、サンチャゴの御父クレオハスとは御兄弟なり。然るに世人もゼズキリシトはジョゼフの御こなりと思ひたるが故に、このアポストロは即ちゼズキリシトの御従弟と存じたる者なり。二つには、ゼズキリシトの御面によく似給ふによつて、御兄弟と申し奉りものなり。よく知らざる者の御面ばかりを見たらんは、いづれを何れとも見分け奉らぬほどに似給ふなり。それによつてジュダスゼズキリシトを悪人に売り渡し奉る時、搦め奉るべき武士どもにこのアポストロを取りまぎらかしては如何と存じ、我が面を吸ふべき人を搦めよと合図をしたるとなり。(『サントスの御作業』サントジャコブ伝)

ヨーロッパではたとえばジョットの絵に代表されるように受難の場面は目に見える形で提示された。日本でもおそらくマリア十五玄義図や銅版画を通してこの場面を目にする機会があっ

たにちがいない。しかし、クリシタンの宣教師にとってもっとも有効な手段はイエスの受難をことばであらわすことである。かれらはイエス逮捕の契機をなすユダの裏切りを「顔を吸ふ」「面を吸ふ」という表現によって伝えようとしたのであった。

もちろん、このことばが用いられるのは受難の場面にかぎらない。たとえば、マリアが生まれたばかりのイエスを抱きながら与えたキスも「顔を吸ふ」と訳される。

さてまたこのおん主はおん身の御胎内より生まれ給ふと見給はば、いかにもおん睦ましく抱き、み顔を吸ひ給ひ、貴きおん乳房を含め参らせられて、いろいろに愛し、御大切のおん事を尽くし給はん事を信心を催し観念致すべし。(『ロザリヨの経』)¹⁶⁾

このような訳語は聖人伝の翻訳にも頻出する。聖人伝の翻訳は聖書の翻訳と同等あるいはそれ以上に重視され、『サントスの御作業』刊行以前から写本の形で広く読まれたものだが、このなかでもイエスや聖人へのキスを「顔を吸ふ」ということばであらわしている。

天狗の進退となりたるアニマはゼズキリントの貴き御顔を吸ひ奉りたる口より出づべきことは相応せぬことなり。(『サントスの御作業』サンマチャス伝)

或る国の帝王御威光盛んなりしが、御車に召して、行幸なる路次のかたはらにあやしの姿なる者二人立ち居たり。彼が面黄ばみ、破れたる衣裳を身にまとひ、全体衰へ、あさましかりしを帝叡覧あつて、御車よりおりさせ給ひ、御前後左右のもろもろの大臣をばはばかり給はず、地上にひれふし礼拝し給ひて、立ちあがり、いだきつき、その顔を吸ひ給ふ。(『サントスの御作業』サンバルラン伝)

天狗その御前に出現して、企て給ふ御望みを妨げ奉らんと種々の障碍をなすといへども、ジョサハツは御主我を守護し給へば、恐るべきことなしとて、二年の間かくの如く難儀をこらへ給ひ、バルランを訪ね給へども、見あひ給はず。二年過ぎてバルラン居給ふ岩窟へ行き、その口に立ち、いかにパアデレ我に要文を唱へ給へと、呼ばはり給へば、バルランこの御声を聞き給ひて出でむかひ、互にいだきつき、御顔を吸ひ、歓喜の御涙にむせばせ給ふなり。(『サントスの御作業』サンバルラン伝)

このことを聞き給ひて、エウヘミヤノわが髪をかき乱し、髯をかなぐつて、ふっと立ち、御死骸に走りかかつて抱きづき、さもなつかしげに御顔を吸ひ給ひ、なういかにわが子のアレイシヨ御身はさてもこの家に久しく居給ひながら、父をばはたと見捨てられ、終に一言をも宣はずして、何とて我にかほどこまで深き悲しみをばかけ給ふぞ？ あら本意なや！くやしやと御死骸に対して、恨みかこち泣きくどき給ふ所へ、…(『サントスの御作業』サントアレイシヨ伝)

「顔を吸ふ」にせよ「面を吸ふ」にせよ、すでに日本語として存在した「口を吸ふ」ということばを踏まえながら、「顔」「面」という言葉に置き換えることによって「口を吸ふ」の生々しさを取り除こうとした表現と考えられる。

VII 無事のしるし

キスの翻訳のなかで注目しなければならないのは、「無事」ということばを用いる訳語である。これは、これまで述べてきた分類とは別に、それぞれの訳語に「無事のしるしとして」という形容を付け加えるものであった。たとえば、修道女同士の挨拶として、

然れども、先づこの門派の衣裳を着せられよと申さるれば、その如くして、ヘプロニヤの前に出でらるるに、いづれも比丘尼達は同じ門派の人なるべしと、無事のしるしとして手に手を取り、顔を顔にあてて、各々いつきかしづかるるものなり。『サントスの御作業』
サンタヘプロニヤ伝)

という表現がある。これは、同じキリスト教会に属するもの同士の絆を示す行為にほかならない。また『スピリツアル修行』においては、

クルスに掛かり給ふ御姿を見奉れ：妙なる御大切の知るべを以て汝にも御大切に思ひ奉れと勧め搦め給ふ事を分別すべし。御足を釘にて打ち付けられ給ふ事は汝を待ち給はんとの御知るべなり：御手を拵げて在ますは親しく汝を抱き取り給はんとの義なり。御頭を傾け給ふは無事の知るべとして汝の面を吸ひ給はんとの御内証を表し給ふ事なり。御脇の疵開けたるは汝危く事無く心を休めん為にその御心の内へ呼び入れたく思ひ召す事を表し給ふ義なり。『スピリツアル修行』)

とあるように、十字架上のイエスが首を傾けているのは「無事のしるべとして汝の面を吸ひ給はん」という神の意志をあらわすものだと説明し、

かのグロウリヤの帝王にて在ます御主深き御歎喜を含み給ひ、そのアニメを迎へ取り給ふべき為に御身のトロノより降り給ひ、量りも無き御大切を以てあれこれに抱き付き給ひ、又御身の貴き御手を以てその人々の眼の涙を拭ひ給ひ、又御身の貴き御口を以て永き無事の験としてかのアニメの顔を吸ひ給ふべき体を思惟すべし。『スピリツアル修行』)

と、天国で神が「貴き御口を以て永き無事の験としてかのアニメの顔を吸ひ給ふ」ありさまを想起せよと論じている。イエスを冠するキリスト教会における神と隣人への愛を実現したときはじめて、キスを意味する「顔に顔をあてる」「顔を吸ふ」「面を吸ふ」という行為が「無事のしるし」として認められるとあってよい。

罪深い女がイエスの足にキスをしたとき、ファリサイ人シモンは、イエスはあの女がどんな奴か知らないのではないかと考えた。ところが、その主人に向かってイエスは「あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人は私が入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった」(新共同訳聖書)と言って非難する。イエスにとって、シモンよりもむしろ罪深い女の方が信仰の上でまさっていると考えられたのである。

Et conversus ad mulierem, dixit Simoni: 《Vides hanc mulierem? Intravi in domum

tuam: aquam pedibus meis non dedisti; haec autem lacrimis rigavit pedes meos et capillis suis tersit. *Osculum* mihi non dedisti; haec autem, ex quo intravi, non cessavit *osculari* pedes meos. Oleo caput meum non unxisti; haec autem unguento unxit pedes meos. 》(Vulgata Lc. 7. 44-46)

E, voltando-se para a mulher, disse a Simão: Vês esta mulher? Entrei em tua casa, e não me deste água para os pés; esta, porém, regou os meus pés com lágrimas e os enxugou com os seus cabelos. Não me deste *ôsculo*; ela, entretanto, desde que entrei, não cessa de me *beijar* os pés. Não me ungiste a cabeça com óleo, mas esta com bálsamo ungiu os meus pés. (PV Lc. 7. 44-46)

この部分をキリシタンは、

ゼズスまことに正直に糺明すと宣ひ 後の女人を御覧あって シマンに仰せけるは この女房を見るや否や 御辺の私宅に赴きけるに足を洗はん為に水をだに与へざれども 彼の女房は涙をもってわが足を洗ひ鬢髪をもって拭ひけるなり。衆中に無事のしるしを現はさざれども 此の女房は座中に入りてよりこのかた足を吸ふ事、罅隙なし。油をもって塗らざれども、彼の女房は薬をもって我が足を塗れり。(『バレット写本』)

というように、「衆中に無事のしるしを現は」という表現と「足を吸ふ」という表現で、二人のキスを区別して翻訳した。おそらく、ファリサイ人がイエスに不信感を抱いていること、すなわちイエスの教会の外部にいる存在であることを示すためにちがいない。ここにあらわれた「無事」は、キリシタンにとって欠かすことのできないことばであった。

「無事」は「平和」*pax*の翻訳語である。キスの翻訳に「無事のしるし」ということばを用いたのは、おそらく、ミサにおける「平和の接吻」*Osculum pacis*を意識してのことだろう。宣教師と信徒が教会の内部でかわすこの挨拶は、神からの賜物としての平安を祈願しつつ感謝を捧げる儀礼であった。この儀礼を念頭に置いて、原文にない「無事」という語を入れることによってキリシタンはキスという行為の持つ独自の意味をあらわそうとしたのである。

VIII 無事と戦ひ

キリシタンにとって「無事」とはたんなる平和ではない。もちろん、イエスが山上の説教で「無事有る者はデウスの御子と呼べるべきによってベアトなり」(『バレット写本』)「無事有人はでうすの御子とよばるべきによてくはほうなり」(『どちりなきりしたん』)と説いたように、「無事有る者」*Os Pacificos*であることは、キリシタンが追い求めるべき真の幸い *Bemaumenturança* に属する。しかし、イエスは同時にこのように語ってもいるのである。

斯様なる責を御扶手、はるか以前に御弟子達に告げ給ふ也。此はこの難儀に逢ひ給はん時

は、御力を落とし給ふまじき為なり。サンマテウス十箇条に宣ふは、下界に無事を置く為に降らず、戦ひをさせんがためなり。その故は、親子兄弟、親類眷族の中を不快させんが為に来る、人の家内の者は其身の為に敵となるべきもの也と宣ふ也。この心は無事安穩の源にてましますゼスキリント、人間に御無事を与え給はん為にこそ天降り給へども、無事を置かんが為に来らずと宣ふことは、御行跡を学び奉る人の為に敵数多出来して、彼等が中に無事あるまじきとの心也。(『ヒイデスの導師』)

イエスが十二使徒に向かって言った「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、とおもってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ」(新共同訳聖書)ということだが、ここでは「下界に無事を置く為に降らず、戦ひをさせんがためなり」と訳されているのだが、スペイン語原典を見ると、

Toda esta tempestad de persecuciones denuncio el Salvador mucho antes a sus discipulos, para que estando preuenidos con este conocimiento, no desmayassen quando en ella se viessen. Y assi dixo a sus discipulos por S. Mattheo, No penseys que vine a poner paz en la tierra: sino guerra. Porque vine a poner diuision entre el hombre cõ su padre, y entre el hijo y su madre, y entre la nuera y su suegra, y los familiares de la casa del hombre seran sus enemigos. (LG V)

となっており、pasを「無事」、guerraを「戦ひ」と訳しているばかりでなく、『ヒイデスの導師』の後半、「この心は無事安穩の源にてましますゼスキリント、人間に御無事を与え給はん為にこそ天降り給へども、無事を置かんが為に来らずと宣ふことは、御行跡を学び奉る人の為に敵数多出来して、彼等が中に無事あるまじきとの心也。」が加筆であることがわかる。この加筆に「無事」ということばの両義性が凝集されているといってもよい。平和の根源であるイエスがなぜこのようなことを言ったのかという問いに対して、クリシタンは教会の外部における「敵」との「戦ひ」を乗り越えなければ真の「無事」に至ることができないと答えているのである。

如何に子、我が無事を汝等に遺し、我が無事を汝等に与うる也。然れども世界の与ゆる如くには与えずと云ひをきし也。皆人、無事を望むと雖も、誠の無事に当ることを歎かず。我が無事は謙りたる者と柔和なる者と共にあり。汝が無事は、心より万事を堪忍するにあるべし。我が云ふ事を聞き、我が声を慕ふに於ては、多くの事に無事あるべし。(『コンテムツスムンヂ』)

イエスによれば「誠の無事」は彼に従う道にしか見いだされない。そこには妥協は介在しないのである。「人の生涯は世界にて合戦なり」(『コンテムツスムンヂ』)ということばからわかるように、神からの賜物である「無事」を獲得するためには「心より万事を堪忍する」という「戦ひ」や「合戦」は欠かすことのできない試練であった。

キスの翻訳に「無事のしるし」ということばを添えたとき、宣教師たちは、イエスにつらなることによってはじめて達することのできる「誠の無事」を意識していたはずである。キリシタンにとって「無事のしるしとして顔を吸ふ」ことはたんなる挨拶にとどまらず、いかなる困難にもうちかつ強い信仰を共有する者同士の連帯の行為なのであった。

注

引用文献のうち、対訳のあるものは以下に該当箇所を注としてあげ、キスの翻訳の原語をイタリックで示す。ここでいう対訳とは、翻訳原典ならびに原典に近いと考えられるものを指す。『バレット写本』の場合はラテン語聖書（Vulgata）と16世紀のポルトガル語訳聖書を併記し、『ロザリヨの経』の場合はその本文の翻訳に基づいて編まれた『西日辞書』の対応箇所を記す。なお、引用のなかで対訳のないものは現在のところ原典を画定できないが文脈からキスの訳語と推定しうるものである。

- 1) quando verõ non est occasio peccatũ consumãdi, oscula, amplexus, & vsque ad partium verendarũ tactus saepius accidere iuxta desiderium. (『懺悔録』)
- 2) Mas aquela sancta Sophia, la qual diximos auer prohibado a Clemente, y hecho con el officios mas ñ de madre viendo como despues de tan largo tiempo auia buuelto a su partia con el resplandor y hermosura de su gloriosa confession, no cabia en si de plazer, esperando luego la corona que le auia de venir del cielo. Vino pues denoche a la carcel, y abraçando a Clemente, y derramãdo muchas lagrimas, *besaua* con grande deuocion sus manos, y su rostro, y todos aquellos sagrados miembros, pidiendole que le diesse cuẽta de todos los caminos y trãces que auia passado. Y dando el razon de todo esto, ella con vnos lienços alimpiaua la sangre y las heridas del sancto, y luego le dio de comer de los manjares que acostũbraua el comer en su casa. (LG II)
- 3) Y la Charidad de S. Catherina de Sena, que *besaua* la tierra, que hollauã los predicadores, por tener officio de saluar las animas, y pedia a nuestro señor que tapasse con ella la pueta del infierno, para que ninguna anima pudiesse entrar alla. (LG V)
- 4) Cõsideray pois quam grande foy a cõsolãçam dos Apostolos, achandose todos jũtos, & vẽdo sua santissima mãy & senhora, que tanto amauam, & desejanã de ver: com quãta reuerẽcia a saudaram: com quãta deuaçam *beijariam* seus sagrados vestidos como preciosas reliquias: com quãta admiraçam cõsiderauam sua dignidade, & estado altissimo, o qual elles muy bem conheciam: com quanta cõsolaçam olhauã pera aq̃lle venerauel rosto, parecendolhes ñ vẽdo a ella, viam seu amorosissimo mestre & Señor: quam suauess eram as praticas que entre si tinhã: com quanto feruorse ocupauã em lououres diuinos: quãtas lagrimas de deuaçã, & alegria derramauam. (GL)
- 5) Yo pobre y estrangero caminante, determino dar ley al mundo, y hazer, que los hombres me adoren, como a Dios verdadero, aun despues, que yo fuere

- abatidamente crucificado. Y quiero, q̃ la señal de la Cruz, en que yo tengo de padescer, sea adorada con summa veneracion, y que los clauos, y la corona de espinas, y todos los otros instrumentos de mi passion sean adorados, y con gran reuerencia, y deuociõ *besados*, y tenidos por mas preciosos, que todos los thesoros del mundo. (LG V)
- 6) Quan agradescido a aquellas sanctas Marias, que yuan al sepulchro, a vngir su sacratissimo cuerpo, pues se les offrecio en el camino viuio, a q̃ ellas buscauan muerto: y consintio abraçar, y *besar* sus sagrados pies, y adorar aq̃llas preciosas señales de las llagas, que en ellos auia recibio? (LG V)
- 7) diziẽdo que si no fuera por la obligacion de residir en su Iglesia, no descansara hasta yr a ver estas cadenas, y abraçarlas, y *besarlas*. (LG II)
- 8) Mas despues que se dio fin glorioso a su martyrio, vino vn Angel del señor, y libro a la maestra de aquel temor y cuydado, dandole alegres nueuas del fin glorioso de la Virgen, y junto con esto la lleuo adonde estauan las reliquias de su cuerpo adornadas con la confession de la Fe, y con la vestidura del martyrio, que era lo que ella desseaua. Entonces abraçando ella todas aquellas preciosas reliquias y *besando* cada vno de aquellos mienbros, y derramando sobre ellos muchas lagrimas de alegria (LG II)
- 9) Y estando ella para partir desta vida, le dixo, Este es el premio que te pido hijo mio por los trabajos de la criança, y por los dolores del parto, que sea yo glorificada en los miembros de mi hijo, porque ya yo me aparto de ti, y esta luz sensible mañana me falta: por tanto ruego te luz y vida mia, y entrañas mias q̃ no me falte esta esparança. Vna muger Hebrea pario siete martyres, y peleo en siete cuerpos, mas tu solo bastas para mi gloria, y para que sea yo bienaueturada entre las otras madres. Ya yo hijo me parto de ti, y mi cuerpo se apartara de tus suauissimos ojos, mas mi anima estara siempre pendiente de la tuya, con cuya virtud confiadamẽta me presentare ante el tribunal de Christo, gloriãdome en tus trabajos, y en las señales de las heridas que recibiras por el. Esto dezia la buena madre a su hijo, y juntamente *besaua* todos sus miembros diziendo, Dichosa yo que *beso* los miembros de vn martyr, y los miembros que se hã de ofrecer a Christo en sacrificio: y diziẽdo esto, y abraçandolo, y hablando dulcemente con el acabo en paz encomendando su espiritu a Dios, y el cuerpo a las dulces manos de su hijo. (LG II)
- 10) Y auneq̃ salga vn poco del proposito, no dexare de dezir aqui vna cosa de mucha edificacion y consolacion para el Christiano lector. La qual es, que aunque todas las obras de naturaleza y de gracia, prediquen la bondad y amor de nuestro Señor para con hombres (y assi nos inciten y combiden a su amor) pero muy mas especialmente haze esto la adundancia de consolaciones, y regalos conque trata a sus familiares amigos, Porque como aya dos maneras de amor, vno essencial (qual es el de los padres para con sus hijos y a criados) y otro blando y tierno (qual es el que tienen a los hijos chiquitos, a los quales toman en braços, y abraçan, y *besan*, y procuran toda recreacion) no se contenta aquel Padre celestial con tener a

sus spirituales hijos a quel primer amor, mas amalos tambien cõ este amor tierno, regalandos y consolandos con la abundancia de sus deleytes. (LG V)

- 11) cumque amplexatus recidisset in collum Benjamin fratris sui flevit illo quoque flente similiter super collum eius, *osculatusque* est Ioseph omnes fratres suos et ploravit super singulos post quae ausi sunt loqui ad eum. (Vulgata Gn. 45.14-15)

E lançou-se ao pescoço de Benjamin, seu irmão, e chorou; e Benjamin chorou também ao seu pescoço. Faraó ouve falar dos irmãos de José, E *beijou* a todos os seus irmãos, e chorou sobre eles; e depois, seus irmãos falaram com ele. (PV Gn. 45.14-15)

- 12) Rogabat autem illum quidam de pharisaeis, ut manducaret cum illo; et ingressus domum pharisaei discubuit. Et ecce mulier, quae erat in civitate peccatrix, ut cognovit quod accubuit in domo pharisaei, attulit alabastrum unguenti, et stans retro secus pedes eius flens lacrimis coepit rigare pedes eius et capitis sui tergebat, et *osculabatur* pedes eius et unguento ungebat. (Vulgata Lc. 7. 36-38)

Convidou-o um dos fariseus para que fosse jantar com ele. Jesus, entrando na casa do fariseu, tomou lugar à mesa. E eis que uma mulher da cidade, pecadora, sabendo que ele estava à mesa na casa do fariseu, levou um vaso de alabastro com ungüento; e, estando por detrás, aos seus pés, chorando, regava-os com suas lágrimas e os enxugava com os próprios cabelos; e *beijava-lhe* os pés e os ungia com o ungüento. (PV Lc. 7. 36-38)

- 13) Ora contemplay qual foy a alegria desta deuotissima molher, quando vio & conheceo seu mestre, a quem ella grandissimo amor tinha, que a chamaua por seu nome: quam subitamente se lhe mudou tanta pena em tanta alegria: quam grãde era o fogo de seu coração, que como fora de si esquecida da majestade deste Señor, não se podia ter que se não arremessasse a seus pees, pera lhos *beijar*. (GL)

- 14) promesa y concierto. qetyacu. / besar. sui, ũ. (『西日辞書』)

- 15) Muchos corrê a diuersos lugares por visitar reliquias, & sanctos & marauillãse de oyr sus miraglos: miran los grandes edificios de los tēplos: *besan* los sagrados huessos guardados en oro & seda: y estas tu aqui presête delâte de mi eñl altar, dios mio, sancto de los sanctos, criador de todas las cosas, señor de los âgeles: & aũ no te miro cõ deuociõ? Muchas vezes la curiosidad de los hõbres & la nouedad de las cosas q̃ vã a ver es ocasiõ de yr a visitar cosas semejàtes, y dello traen poco fruto de enmienda, mayormête quãdo cõ liuiãdad andã de aca para alla sin contradicion verdadera. (LG CM)

- 16) cariñoso y regalado. mutcumaxij. / rostro. cavo. / besar. sui, ũ. / pechos tetas. chibusa. darle. chibusa vo fucume, uru. / agasajar. aixi, uru. (『西日辞書』)

引用文献

虎明本狂言：池田廣司，北原保雄『大蔵虎明本 狂言集の研究 本文篇』表現社，1972-83
室町物語：横山重，松本隆信『室町時代物語大成』全15巻，角川書店，1973-88

PRELUDE TO A KISS (米井)

- 秀吉書簡：桑田忠親『豊臣秀吉』，桑田忠親著作集第5巻，新人物往来社，1979
- 『義経記』：岡見正雄『義経記』日本古典文学大系，岩波書店，1959
- 『曾我物語』：市古貞次，大島建彦『曾我物語』日本古典文学大系，岩波書店，1966
- 『稚児観音縁起』：『当麻曼荼羅縁起 稚児観音縁起』続日本の絵巻20，中央公論社，1992
- 『天草本平家物語』：福島邦道解題『天草版平家物語』勉誠社文庫，1977
- 『日本覚書』：松田毅一，E・ヨリッセン『フロイスの日本覚書』中公新書，1983
- 『日本教会史』：ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』大航海時代叢書，岩波書店，1967-70
- 『日葡辞書』：亀井孝解説『日葡辞書』勉誠社，1973
- 『羅西日対訳辞書』：大塚光信『羅西日対訳辞書』勉誠社，1979
- 『羅葡日対訳辞書』：福島邦道，三橋健解題『羅葡日対訳辞書』勉誠社，1979
- 『西日辞書』：大塚光信，小島幸枝『西日辞書』臨川書店，1985
- 『懺悔録』：大塚光信『コリャードさんげろく私注』臨川書店，1985
- 『コンテムツスムンヂ』：姉崎正治『切支丹宗教文学』同文館，1932／『姉崎正治著作集』第五巻，国書刊行会，1976
- 『サントスの御作業』：福島邦道『サントスの御作業 翻字・研究篇』勉誠社，1979
- 『スピリツアル修行』：林田明『スピリツアル修行の研究』風間書房，1975
- 『どちらなさりましたん』：亀井孝，H・チースリク，小島幸枝『日本イエズス会版キリシタン要理』岩波書店，1983
- 『バレット写本』：山田俊雄翻字『バレット写本』，『キリシタン研究』第七輯，吉川弘文館，1962
- 『ヒイデスの導師』：姉崎正治『切支丹宗教文学』同文館，1932／『姉崎正治著作集』第五巻，国書刊行会，1976
- 『ロザイロの観念』：小島幸枝『キリシタン版『スピリツアル修行』の研究』資料篇，笠間書院，1989
- 『ロザリオの経』：高羽五郎『ロザリオの経 翻字篇Ⅰ～Ⅳ』国語学資料，1955／1960
- GL: Gaspar Loarte, *Instruçam & auisos pera meditar os mysterios do Rosairo da sanctissima Virgem Maria*, 1587 (小島幸枝『キリシタン版『スピリツアル修行』の研究』資料篇，笠間書院，1989)
- LG CM: Fray Luis de Granada, tr. *Contemptus Mundi*, 1557, 天理図書館蔵
- LG II: Fray Luis de Granada, *Segunda parte de la Introduction del Symbolo de la fe*, Salamanca, 1588, 豊島正之氏蔵
- LG V: Fray Luis de Granada, *Quinta parte de la Introduction del Symbolo de la fe*, Salamanca, 1588, 豊島正之氏蔵
- Vulgata: Deutsche Bibelgesellschaft, *Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem*, Stuttgart, 1983.
- PV: 『日ポ対照 新約聖書 詩篇つき 新共同訳』日本聖書協会，1988
- 新共同訳聖書：『聖書 新共同訳 旧約聖書統編つき』日本聖書協会，1987